

海外レポート

最新

インドのブラックタイガー養殖事情①

—過熱するエビブームの背景

中島 満



世界のエビ養殖は、生産量六〇万台に達し、サケ・マス養殖とともに一九八〇年代後半から著しい成長を見せてきた。その主役は、東南アジアにおけるブラックタイガーと中国の大正エビ、及びエクアドルホワイトであったが、一九九三年の中国大正エビの病気発生による急減によって、我が国のエビ市場においては、ブラックタイガーへの依存度がいつそう高まってきているのが現状である。

ブラックタイガー養殖は、一九八八年の台湾の斃死急減によって主力生産国は、タイ、インドネシアの二大国にフィリピン、インドが加わった四国がリードしてきた。なかでも、成長著しいのがインドである。インドネシアがトップの座を堅持する一方、タイの伸び悩みとフィリピンの減少にあって、急成長を遂げたのがインドである。

インドのブラックタイガー養殖は、いったい、タイやインドネシアに比べてどこがどう違うのか、どこまで伸びる可能性を秘めているのか。インド各地で、健康な強いエビ作りを主眼においた指導に全力を傾注されている藤本岩夫氏（エーション・アクアカルチャー・エンタープライズ

代表）の話を交えて三回の連載でまとめてみようと思う。

第一回では、インド国内の過熱するエビブームの背景と日本の対応について整理する。そして、第二回に具体的な地区毎の生産事情に触れ、第三回にインドにおいて藤本氏が実践している有機エビ養殖の試みとブラックタイガー養殖の問題点について紹介してみたい。

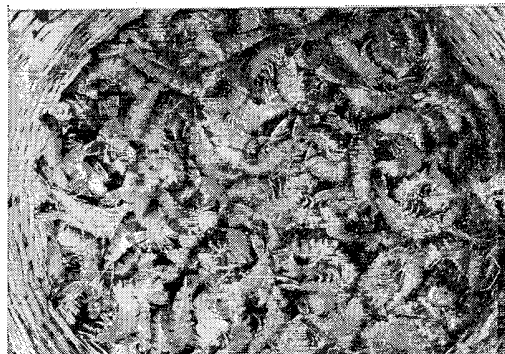
僅か二年でインドBTがエビ相場のプライスリーダーに

私は、一九九三年三月から四月にかけて約二〇日間、インド南部のエビ養殖場を見てまわった。インド政府・商業省、海産物輸出振興局（MPEDA）主催の第一回インドアクア・養殖振興会議が、三月一九日から二三日までマドラスで開かれたのを機会に、主催者からの招待を受けて実現したものだが、早いものでもうまる二年たってしまった。そして、一九九五年一月二七日から四日間わたって同じくマドラスで第二回のインドアクアが開かれることになっている。

第一回のインドアクアは、「青の革命・ブルーリヴォリュション」という養殖産業、特にエビ養殖の拡

大発展を目指した触れ込みで、国内外に大々的なPRを行った。それにもかかわらず、日本サイドの関心を引くにはいたらなかった。会議や展示会場には、藤本氏やその関係者を除けば日本人の姿は皆無であり、それだけ二年前には、インドのエビ養殖は日本にとっては未知数であったのである。

しかし、その後わずかずつだがブラックタイガーの供給が増え始めると、日本のエビ市場には「インドが来るぞ」という心理的な警戒感が起こり始める。一九九三年の後半から昨年にかけては前年比七、八割増のまとまった数量がどっと日本に入っ



ブラックタイガー

表1 日本への冷凍エビ輸入数量(主要国別ベスト6) 単位: t

国	1994 (1~8月)	1993	1992	1991	1990	1985	93/85
①インドネシア	42,202	56,000	54,080	53,875	53,162	24,357	230.0%
②タイ	30,939	46,400	46,896	47,224	42,483	7,371	629.5%
③中国	29,300	33,900	32,781	35,867	35,708	36,235	93.6%
④中南米	13,590	27,300	34,741	35,434	43,031	10,664	256.0%
⑤ベトナム	25,265	26,400	23,109	18,657	24,704	6,974	378.5%
⑥フィリピン	10,827	15,500	18,391	22,402	18,393	5,986	258.9%
インド・シアン (数量)	200,938	298,544	272,761	284,493	283,449	182,912	163.2%
(金額)	14.6%	11.4%	12.0%	12.6%	12.6%	19.8%	
	—	9.5%	9.5%	9.9%	9.9%	16.4%	

※ 大蔵省貿易統計より。1994年については1~8月までの累計。

てきた。昨年七月には安値記録を更新するほどであった。いまや、インドの養殖ブラックタイガーが、善かれ悪しかれエビ相場全体に影響を与えるプライスリーダー的存在になっているのである(表1参照)。

それだけに、今回の第二回の

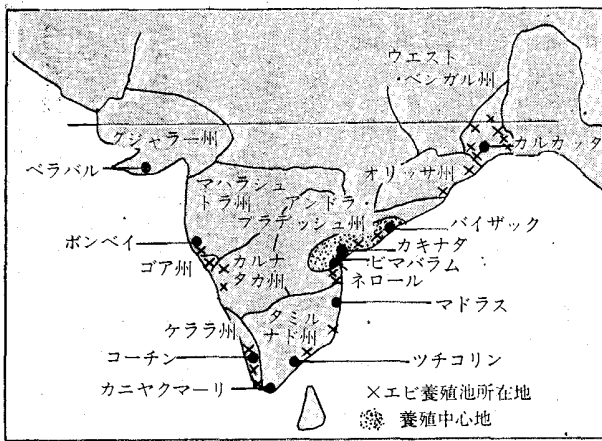


図1 インドの沿海各州とエビ養殖地区

インドは、沿海の一〇の州・地区にまたがる海岸線は八五〇〇kmにも達し、エビ養殖に適する汽水域の総面積は一二〇万haに及ぶ。東海岸の北から、ウエスト・ベンガル州、オリッサ州、アンドラ・プラデッシュ州、タミルナド州、ボンダイチエリ地区の四州一地域があり、西海岸には北からグジャラート州、マハラシュトラ州、ゴア州、カルナタカ州、ケララ州の五州がある(図1、表2参照)。

東海岸と西海岸に分けて、地理的な概況をみると、東海岸は海岸線に沿って平坦で広大な底湿地帯が連なり、汽水域、大河川や、人工水路が網の目のように各所に豊富な淡水を供給しており、エビ養殖池の開発には最適な環境となっている。また、西海岸は、

東海岸に多い養殖適地

日本のエビ市場におけるインドのポジションは、一九八五年まではインドネシアより上をいく第一位であるといえよう。

会議に対しては、日本サイドの反応は違っている。商社、バイヤーや技術者などの関心も当然高い。このインドアクアに対する、手のひらを返したような日本サイドの対応ぶりというものが、この二年間のインドエビの予想以上の急成長ぶりを示しているといえよう。

したが、東南アジア各国の養殖エビ生産が軌道に乗る八六年以降は順位をじりじりと下げ、三、四位を低迷してきた。トロール漁業を中心とした世界一のエビ生産国であったインドは、いまその座に復活すべく、国を挙げてエビ養殖の振興策に取り組み始めているのである。

ケララ州を除いて砂丘、岩礁地帯が多く、グジャラート州のように汽水域があっても干満差が大きくて、総じてエビ養殖適地が少ないのが特徴。

このなかで、ウエスト・ベンガルとケララの二地区が伝統的な粗放養殖地帯であり、それぞれ有頭ベースで一万吨前後の生産を長く続けてきた。ウエスト・ベンガルがブラックタイガー、ケララはムキエビ向け的小型エビを対象としている。一方、政府の「青い革命」路線に乗って一九八〇年代後半頃から開発されてきた新興養殖地区が、アンドラ・プラデッシュ州を中心とする東海岸でもオリッサ以南の地区である。

養殖産地開発の二つの流れ

インドのブラックタイガー養殖の特徴として挙げられるのが、新興養殖池の開発に二つの方向が取られているということである。

一つはアンドラ・プラデッシュ州のほぼ中央を流れるゴダバリ川とクリシユナ川の二大河川の広大なデルタ地帯に形成された、農民を池主とした粗放養殖地帯である。これが、ビマバラム、マチリパトナム、ナガランカの豊かな穀倉地帯を基盤にし

表2 インドのエビ養殖適地と推定生産量の推移

州名	汽水域面積 (ha)	養殖池面積 (ha)			推定生産量 (t, 有頭ベース)		
		1992	1993	1994	1992	1993	1994
ウエスト・ベンガル	405,000	33,918	35,000	37,000	13,800	14,500	16,000
オリッサ	31,600	7,417	8,158	10,000	3,800	4,500	5,400
アンドラ・プラデシュ	150,000	8,100	9,700	12,000	9,700	10,000	20,000
タミルナドゥ	56,000	480	800	1,500	700	1,000	2,000
ケララ	65,000	13,145	13,500	14,000	9,500	10,000	12,000
ポンディシェリ	800	—	—	300	—	—	1,000
カルナータカ	8,000	2,540	2,600	3,000	1,100	1,500	2,000
ゴア	18,500	525	600	1,000	—	600	1,000
マドhya Pradesh	80,000	1,869	2,500	3,000	300	500	2,000
ウड़ीシ	376,000	231	300	1,000	930	1,000	3,000
合計	1,190,900	63,227	73,158	82,800	40,000	43,600	64,400

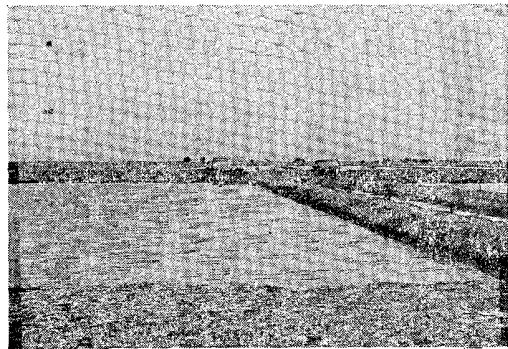
注(1) 1992年はMPEDA資料。93、94年は藤本岩夫氏の推定。  
 注(2) 1992年度のウエスト・ベンガルの生産量の4割は小エビを含む。同様にケララの9割は小エビ、残りはホワイトで、BTはわずか。カルナータカ州以北の西岸はすべて小エビとホワイト。  
 注(3) 93、94年の前年比増加分は、東岸はほとんどBT、西岸はBTとホワイトがほぼ半分ずつとみられる。

ており、現在で最も生産量を上  
 げている。  
 そして、もう一つの方向がア  
 ンドラ・プラデッシュ州の最南  
 部に位置するネロールを中心に  
 展開されている、大規模資本を  
 投下して開発するセミインテン  
 シブ養殖方式による一〇〇ha単  
 位の大型プロジェクトである。

(1) ビマバラム地区中心の計画的  
 粗放養殖  
 インドの粗放養殖といっても、ウ  
 エスト・ベンガルやケララのように  
 自然の干満差をそのまま利用した一  
 ha当たり三〇〇kg前後の収穫量にと  
 どまる伝統的養殖法ではなく、ビマ  
 バラム地区を中心に発達した計画的  
 粗放養殖法ともいえる方式であ  
 る。ビマバラ  
 ム地区は、元  
 来稲作地帯で  
 あり、既によ  
 く整備された  
 かんがい用水  
 路が縦横に走  
 り、豊富な淡  
 水を提供して  
 くれる。六月  
 から三月まで  
 ゴダバリ川の  
 淡水がなが  
 れ、四、五、  
 六月の半ばま  
 では用水路整  
 備のためにそ  
 の淡水がせき  
 止められる。  
 このとき、海  
 岸線より一〇

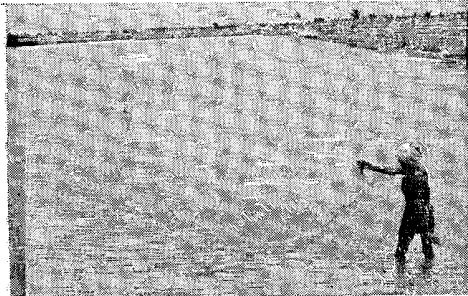
km以内の内陸部に海水が遡上してくるが、この塩水を利用してエビ養殖を行うようになった。

豊富な地元の天然種苗を、塩分の残っている六〜七月に池入れし、第一回作は一〇〜十一月に収穫される。第二回作は、淡水に馴致させた一g以上の大型種苗を、一ha当たり五〇〇〜一万尾の密度で池入れし、後は放置したままで翌年の三〜四月に取り揚げる。自家製の配合飼料を与えているが、二回作めは、池外の水路が淡水状態となっているため、ゼロ塩分下での養殖となる場合が多くなる。その結果、第二回作の成績が悪く、収支の悪化につながっ



ビマバラムの粗放養殖池

ているということである。  
 昨年から、この二回作めのトラブ  
 ルを防ぎ、さらに池の老化を防ぐ意  
 味もふくませて、二回作めでは稲を  
 作り、さらにその稲の収穫後、三回  
 作めにダルという豆を植えるといっ  
 た三毛作を実施する養殖業者が出始  
 めている。稲から出る藁を原料にダ  
 ル栽培中に堆肥をつくり、ダルの収  
 穫後は、堆肥を加えて耕耘し、六月  
 からエビの養殖というローテーション  
 だ。一回作の収穫量で一t近い成  
 績を記録し、高収益を上げたサクセ  
 スストーリーも生まれている。ビマ  
 バラム方式とも呼べる新しい粗放  
 養殖のスタイルの実験が今後も行わ  
 れるといふ。  
 また、この地区の特徴として、製  
 氷施設や、冷凍加工施設がこの二年  
 間でキャバを増やしていることか  
 ら、池↓加工近接の利点をフルに生  
 かして、インドでも高品質ブランド  
 を生産しているということが挙げら  
 れる。  
 (2) ネロール地区中心のセミインテン  
 シブ養殖  
 ゴダバリ・クリシュナデルタ地帯  
 の粗放養殖とは対照的に、大規模  
 養殖場と加工施設を完備させた養殖  
 地区が、同地帯から二〇〇km南のネ



マチリパトナムの粗放養殖池

ロールである。タミルナドの州都マドラスから車で五時間あまり、広大な旧塩田地帯とどこまでも続く砂浜に突如として一大養殖地帯が出現したのである。このネロール地区だけで一万ha以上もの養殖適地がある。MPEDAの輸出振興策とエビ養殖奨励策の一環にのって、セミインテンシブ養殖を基盤においた大規模養殖プロジェクトがこの地区に集中している。主なプロジェクトを挙げてみると、

〔ウオーターベース社〕—日本円で約一七億円の資本金により、一九九一年設立。台湾と地

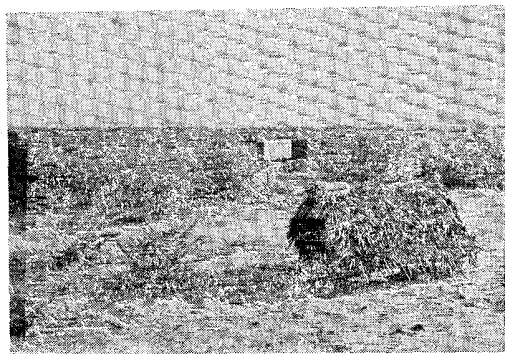
元合弁。池面積一二〇ha、餌料工場、ハッチェリー、加工場が、一か所に設置され、昨年初めから本格稼働。インド最大級のプロジェクト。

〔サラット・シーフード社〕—MPEDAのバイロットプロジェクトとして、ネロールで最も早く養殖生産を始めている。〇・五×一・五haの池が二〇面稼働中であり、今年中には加工施設も整備される。

〔マクンタ・アクアファーム社〕—地元大企業と米国籍資本などで設立。一五〇haの養殖池にハッチェリー、餌料工場、加工場の建設がほぼ完了、今年から本格操業が始まる。ウオーターベース社なみの規模を誇る。

となるが、このほかに、ランクアクア社、アクアマリン社、スパルナ・アクアマリン社など七、八社が稼働態勢に入っている。

この不毛の赤い大地には二mにも満たないトゲトゲの灌木が見渡す限り茂っている。ネムノキの葉に似たこの木は誰がつけたのか、「ジャパニーズバブルツリー」と呼ばれている。一九九〇年、まだ計画前のこの当たりの土地の値段は一エーカー（約〇・四ha）一〇〇〇ルピー、日本円で四〇〇〇円であったという。



見渡す限りバブルツリーが生い茂る（ネロール）

その後、買収が始まり、建設も進むようになる。一年後には一万ルピーに、二年後には一万五〇〇ルピーに、そして私が取材した昨年には五万ルピーでも手当ができないという暴騰を見せる。

二年間で五〇倍の値上がりである。まさにインド版バブルがエビ養殖をめぐって起こったのである。ジャパニーズバブルツリー生い茂る赤い大地から生まれたブラックタイガーはまさに、バブルの申し子といったところだろう。

第一回インドアクアの開催された一九九三年を、インドエビ養殖元年

とするなら、今年は三年目に入りステップの年となるであろう。ブラックタイガーとホワイトを合わせた養殖エビの生産量は、MPEDA資料と藤本氏の推定によると、有頭ベイスで、四万t（九二年度）、四万四〇〇〇t（九三年度）、六万四〇〇〇t（九四年度）と着実に伸びてきた。

今年の生産のポイントは、ずばり種苗の供給如何にかかっているといえよう。また、日本市場においては、ブラックタイガー相場は昨年ついにインドネシア・一六／二〇サイズ・一・八kg判で三〇〇〇円をきって、価格帯でいえば平均で二七〇〇〜二八〇〇円となった。今年は、その一段下の価格帯が見込まれるだけに、インドBTがどの水準まで生産量を上げるかが大きな鍵を握っているといえよう。

（つづく）  
（水産ジャーナリスト）

